

# ある夜の姉と弟

小川未明

青空文庫



ある日のこと、義夫は、お母さんにつれられて町へいくと、露店が並んでいました。くつしたや、シャツなどを拵げたのや、バナナを積み上げて、パン、パンと台をたたいているのや、小間物を並べたのや、そうかと思うと、金だらいの中で金魚を泳がしているのや、いろいろでありましたが、あるところへくると、ちょうど自分くらいの男の子が、集まっている店がありました。それは、やどかりのはいった、箱をござの上へ置いて、売っているのです。やどかりは、小さなはしごの上へ登ったり、たがいに組み打ちをやったり、転げ合ったりしていました。どれも脊中にかわいらしい貝を負っている、歩くときはかにに似た不思議な虫

でありました。いったいどこから、持<sup>も</sup>つてきたのだろうか、義<sup>よ</sup>夫<sup>しお</sup>は、しばらくお母<sup>かあ</sup>さんと立<sup>た</sup>つてながめていました。

「あんな大きいのがいるよ。」と、このとき義<sup>よしお</sup>夫<sup>おお</sup>は、目<sup>め</sup>をみはりました。

そのやどかりは大き<sup>おお</sup>な白<sup>しろ</sup>いとげのある貝<sup>かい</sup>を負<sup>お</sup>つていました。

「よくあんな大き<sup>おお</sup>な貝<sup>かい</sup>を負<sup>お</sup>つて歩<sup>ある</sup>けますね。」

「おばさん、こんなのどこにいるの。」と、きいた子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>がありま<sup>す</sup>。義<sup>よしお</sup>夫<sup>おお</sup>は、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>も心<sup>こころ</sup>にそう思<sup>おも</sup>つていたので、いいことをきいてくれたと思<sup>おも</sup>いました。

「この白<sup>しろ</sup>い大き<sup>おお</sup>いのは、小笠原<sup>おがさわら</sup>島<sup>しま</sup>からきたのですよ。みんな、遠<sup>と</sup>い南<sup>みなみ</sup>の方<sup>ほう</sup>からきたものばかりです。」と、やどかりを商<sup>あきな</sup>うおば

さんは、いいました。

小笠原おがさわらといえは、ずっと南みなみのやしの木きが茂しげる熱帯ねったいの地ちであると思おもいました。

「お母かあさん、あの爆発ぼくはつした三宅島みやけじまより、もつと遠とおいんですね。」と、義夫よしおは、いいました。

「僕ぼく、ほしいな。」

「およしなさい。家いえへ持もつて帰かえると、じき死しにますからね。」と、お母かあさんは、困こまつたようなお顔かおをなさいました。

それでほかの学用品がくようひんなど買かつてもらつて、家いえへ帰かえつたけれど、やはり、やどかりの姿すがたが目めに残のこつていました。また話はなしが耳みみに残のこつていました。

「どうしてやどかりに、こんないろんな形があるの。」と、ほかの子供が、きいたら、

「やどかりは、自分の好きな貝がらをさがして、幾度も、幾度も、その中へ入ってみて、気に入ったのを自分のすみかとするのだそうです。」と、おばさんのいったことなどが思い出されたのでした。

義夫は、お姉さんにお願いで、買ってもらうかと思いましたが、そのうちに、晩方になると、幾度も時計を見上げて、もうお姉さんはどこを歩いているだろうと空想しました。そして、お姉さんが、お勤めから帰ってくると、

「お姉さん、僕に、やどかりを買ってくれない？」と言って、頼

みました。

「町まちに、売うつていたの？」

「うん、お姉ねえさん見みたのかい。」

「見みないけれど、明日あすの晩ばんにいつて買かつてあげましようね。」と、

お姉ねえさんは、答こたえました。

「お母かあさん、お姉ねえさんに、やどかりを買かつてもらつていいでしょ

う。」と、義夫よしおは、ききました。

「買かつてくださるなら、おもらいなさい。けれど、じきに死しにま

すが、かわいそうでない？」

「塩しおみず水みづに入れておけば、生いきているよ。」

また、一いち日はたちました。そして、今日きょうも太陽たいようは、昨日きのうの夕ゆ

うがた  
方のように、雲を赤く染めて西の空に沈みました。

「お姉さんは、まだ帰ってこないかなあ。」と、義夫は、外をながめていました。

「義夫、お姉さんは、疲れてお帰りなさるんだよ。お湯に入つて、ご飯を食べてからにしなさい。」と、お母さんは、自分かつてであつてはいけなさと、おしかりになりました。

お姉さんは、元気よく、いつものように、朗らかな顔をして、お勤めから帰ってきました。

「義夫さん、お湯へ入ると、もう外へ出たくないから、これから、いっしょにいつてきましょう。」と、昨日の約束を忘れずに、いわれました。



「すぐ、いつてもいいの。」

「ええ、まいましたよ。」

「約束やくそくを守まもつて、お姉ねえさんはえらいなあ。」

「だれだつて、お約束やくそくは守まもらなければ、いけませんよ。」

姉あねと弟おとうとは、出でかけました。燈火あかりがついて、町まちはにぎやかでした。

「あのおばさん、きているかしらん。」

しかし、その日ひは、縁日えんにちで、いつもよりかいつそう露店ろてんも人ひ

出とでも多おほかつたのです。

やどかりを売うるおばさんは、いつものところで店みせを出だしていま

した。子供こどもたちは、昼間ひるまよりかたくさんいました。

けれど、義夫よしおのほしいと思おもつた、あしろの白おほい大きなやどかりは、

姿すがたが見えず、売うれてしまったのです。お姉ねえさんからほかのを買かつてもらったが、がっかりしてしまいました。

義夫よしおは前まえを向むいて、さっさと歩あるきました。氣きがついてうしろを振り向むくと、お姉ねえさんは、かくれてしまいました。

「なにしてんだろうな。」と、やどかりの入はいったブリキかんを下さげながら、つぶやきました。やっと追おいついたお姉ねえさんは、

「義夫よしおさんは、現げん金きんね。ご用ようがすむとさっさと歩あるくんですもの。」

「お姉ねえさんがのろいのだい。」

けれど、義夫よしおは、このとき、自じ分ぶんのことしか考かんえぬ自じ分ぶんがなんとなくさびしく感かんじられました。町まちをはずれて、たんぼ道みちへさし

かかりました。

「あの青い火はなんだろう？」と、ふいに義夫は、立ち止まって、怖ろしそうに、ささやきました。

「なんでしよう、子供がいたずらしているのよ。」

青い火の方へ近づくと、だれか、きゆうりの実をうつろにして、内へろうそくをともして畑の中へ立てておいたのです。二人が笑うと、

「お化けだぞう。」と、野菜の茂った間から勇ちゃんの声がしました。

あたりは、すっかり暗くなつて、さらさらと風がとうもろこしの葉を鳴らして、頭の上には、星の光が、きらきらと輝いていま

し  
た。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「ある夜《よ》の姉《あね》と弟《おとうと》  
《》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ある夜の姉と弟

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>